

アジア研究教育ユニット（特別経費）平成 29 年度教育研究報告書

事業課題名	分析アジア哲学を核としたアジア諸大学ネットワークの展開 (台湾派遣)
代表者名	出口康夫
事業概要 (600 字程度)	<p>2018 年 3 月 25-30 日に、哲学専修の修士課程学生 5 人を台湾に派遣した。派遣学生は、他経費で参加した学生等（計 6 名）・担当教員（出口）と合流し、26・27 日に、国立台湾大学において、Kyoto - NTU Philosophy Colloquium of Graduate Students: Self, Subjectivity and Consciousness に参加し、各自研究発表を行った。この会議には台湾大側からは 4 名の教員と 4 名の大学院生が参加した。また 29 日には国立清華大学において、Tsing Hua - Kyoto Student and Young Scholar Workshop に参加し、研究発表を行った。</p>
成果の概要 (800 字程度)	<p>国立台湾大学哲学系との合同大学院生会議は、東アジアにおいて長い哲学研究の伝統を有する両大学による初の本格的な合同会議であったという意味で、大きな歴史的意義を有するものである。この会議では、日台双方の大学院生が、分析アジア哲学を中心とする、それぞれの研究課題について英語での発表を行なったが、発表者の中には、英語での国際会議発表経験が皆無であった者も相当数含まれていた。また参加学生は、単に発表するだけでなく、それぞれ相手大学の大学院生発表に対するコメンテーターの役割も果たした。さらに同会議では、台湾側の英語ネイティブ教員による基調講演も行なわれた。これらのアレンジメントにより、派遣学生は、英語環境下での研究発表や質疑応答に関して、初歩から学ぶ貴重な体験を得ることができた。</p> <p>また国立清華大学でも、同様の会議が開催されたが、京大側の発表者の中には、国立台湾大学での発表内容と同様の発表を行なう者が多々あった。このように、あえて同内容の発表を、短期日のうちに繰り返すことで、学生は、初回発表における反省内容を二回目に活かす機会を持つことができ、また発表技量の向上や研究内容の深まりといった、自らの成長を実感することもできた。このような成功体験によって、学生は、確かな自信と更なる向上心と、また海外でのアカデミックな活動参加に対する積極性を身につけることが期待できる。</p> <p>派遣学生の中には、台湾は言うまでもなく、アジアの近隣諸国を訪問する経験をこれまで持たなかった者も多く含まれていた。そのような学生が、これらの会議を通じて、今回、専門を同じくするアジアの隣国の同世代の大学院生との交流を持ったことは、彼ら彼女らのアジアに対する目を開かせ、常にアジアの同僚たちを意識して研究活動を続けいく姿勢を身につける一助になったものと思われる。</p> <p>今回の派遣は、派遣先（特に国立台湾大学）の教員・大学院生にとっても、改めて京都大学の哲学系院生との組織的な交流を持つ最初の機会となった。その意味で、京大哲学の現在の研究動向とその研究レベルを相手先に知らしめ、今後のさらなる交流の呼び水となる効果があったと思われる。</p>